



校長室だより

校長 山崎 聡子

交流フェスティバル

11月15日(水)、交流フェスティバルを行いました。1年生と6年生、2生と4年生、3年生と5年生がペアになって活動する異学年交流です。さらに、それぞれのクラスに分かれて、クラス単位での活動でした。4・5・6年生がクラスごとにどのような活動をしたらいいか考え、低学年との活動を自分たちで運営していきました。どのクラスも内容が工夫されていて、子供たちの柔軟な発想に感心させられました。また、低学年に高学年が寄り添って活動する姿にも頼もしさを感じました。例えば、ドッジボールで外野を決める際、外野をやりたい1年生が集まってじゃんけんを始める様子を見守っていた6年生が、待ったをかける場面がありました。じゃんけんのタイミングが合わない状況の中で、じゃんけんをしようとしていた様子が見られたためでした。そこで、6年生が「せーの」というかけ声をかけ、それに合わせて1年生がじゃんけんを行い、混乱することなく外野が決まるという一場面がありました。

ルールも様々な工夫がありました。低学年は2個のボールを使っていいけれど、高学年は1個だけしか使えないというルールワンバウンドしたボールに当たったら高学年はアウトだけれど、低学年はセーフにするルール等、よく考えていました。

氷鬼を一工夫して、レンチン鬼をしている交流グループもありました。レンチン鬼というのは、レンジでチンして解凍することから名前がつけられたようです。

鬼にタッチされたら、凍って動けなくなるという遊びですが、動けるようにするために、低学年と高学年が手をつないで、動けなくなった子を通してあげるという動きを入れていました。低学年と高学年が自然に楽しく関われる状況が創り出されていました。

活動後の感想では、「6年生がいつもいてくれて嬉しい」「もっと遊びたい」「またやりたい」「楽しかった」「どんなことをしたらいいか、話合いをしてきたけれど、低学年が楽しく過ごせてよかった」等の発表があり、お互いに充実した時間を過ごせたことが伝わってきました。

異学年交流は、高学年が主体となって企画・運営をしていきますが、その中で、低学年の子供たちの立場に立って考えようとする思いが引き出されていく意味あるものであると思います。また、低学年の子供たちは、温かな関わりの中で、自分たちが大切にされていると感じることができたのではないかと思います。学年が上がり企画・運営する側に立った時に、自分がしてもらったことを生かしていくことができるのだろうかと思います。交流活動は、低学年・高学年共に子供たちの心が豊かになっていく貴重な機会であると思いました。

明治時代の座間市の先人である鈴木利貞が心豊かな教育を目指し、年上の者がリーダーとなり、年少者の指導にあたらせて、子供の自立を促すために創った「幼年会」と令和の今、実施している異学年交流はつながっていると感じます。時代が変わっても大切にしていきたい視点だと思っています。